

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国における太宰治文学紹介の萌芽：華文雑誌『新輪』および白雲訳「皮膚病」に着目して
Author(s)	史, 蕊
Citation	近代文学試論, 61 : 25 - 36
Issue Date	2023-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54893
URL	https://doi.org/10.15027/54893
Right	
Relation	



中国における太宰治文学紹介の萌芽

——華文雜誌『新輪』および白雲訳「皮膚病」に着目して——

史 志

はじめに

太宰治は自身の生涯において、「股をくぐる」「魚服記」「清貧譚」など中国に関係する翻案小説の創作に精力を傾け、中国の歴史や文学作品などに大きな関心を示していた。一方、中国における太宰治文学の紹介や受容も一九四〇年代から現在まで続いている。作品の中国語の翻訳状況や中国語訳本の出版状況などにもとづくと、中国における太宰治文学の紹介や受容は萌芽期（一九四〇年代）、沈黙期（一九五〇年代～一九七〇年代前半）、復活期（一九七〇年代後半～二〇〇〇年代前半）、興隆期（二〇〇〇年代後半以降）といった四つの段階に大きく分類することができる。¹⁾筆者の調べた限りでは、一九四〇（昭和一五）年二月一日に華文雜誌『新輪』第二巻第二期に掲載された白雲訳「皮膚病」（「皮膚と心」）が、中国語に翻訳され、出版物などを通じて正式に中国国内で紹介された初めての太宰治作品である。

「皮膚と心」は、一九三九年一月一日付発行の『文学界』に掲載された短編小説である。太宰が得意とする女性独白体で綴られたこの作品には、皮膚病になることを恐れる「私」の心のコンフリクトが如実に描かれている。

ここで作品名（日）、作品名（中）、訳者、掲載舞台、発行機関、中国語訳の出版時期の順に、中国における太宰治文学の紹介や受容の萌芽期の主要な中国語翻訳作品の情報を整理すると、以下のような²⁾なる。さらに、掲載の場となった各出版物の画像を一部添付する。

- ・ 「皮膚と心」、皮膚病、白雲、『新輪』第二巻第二期、華北交通株式会社総裁室人事課、一九四〇年二月。
- ・ 「さりざりす」、「蟋蟀」、許竹園（章克標）、『訳叢月刊』第三巻第一期、中日文化協会出版組、一九四二年一月。
- ・ 「さりざりす」、「蟋蟀」、許竹園（章克標）、『太平』第二巻第七（八期合併号）、太平書局、一九四三年四月。
- ・ 「さりざりす」、「蟋蟀」、章克標、『現代日本小説選集』第一集、太平書局、一九四三年八月。
- ・ 「竹青」、未詳、未詳、『大東亜文学』（第一、二号を除く）、日本電報通信社、未詳。（この項は推定）。
- ・ 「清貧譚」、「清貧譚」、盧錫熹、『新世紀月刊』創刊号、新世紀月刊社、一九四五年四月。



図1 図2 図3 図4 図5
 (図1～5は各出版物の表紙と訳文の第一頁である。)

画像はデータベース「全国報刊索引」にもとづく。

これまでの研究では、中国における初めての太宰治文学の中国語訳は章克標によって翻訳された「蟋蟀」(「きりぎりす」)であるとの指摘が多く見られ、³⁾『新輪』に掲載された白雲訳「皮膚病」は見落とされる傾向にある。そこで、本稿においては、華北交通株式会社(以下、華北交通)、華文雑誌『新輪』、そして白雲訳「皮膚病」に着目して、太宰治と「皮膚と心」の中国語訳が『新輪』に掲載された背景などの諸問題を明らかにする。また、萌芽期およびそれ以降に出現したその他の太宰治文学の中国語訳作品にも言及しながら、白雲訳「皮膚病」の位置付けについても確認したい。

一 華北交通と華文雑誌『新輪』

華文雑誌『新輪』の紹介に先立ち、その発行機関である華北交通に触れておく。この発起人総会は一九三九年四月一七日に北京にて行われ、そこには北支開発株式会社総裁の大谷尊由、臨時政府行政委員会

委員長の王克敏、南滿洲鉄道株式会社(以下、満鉄)総裁の大村卓一らが出席していた。⁴⁾発起人総会において、「会社設立に関する全般の事務を決定終了し、満鉄北支事務局一切の経営設備を継承、華北大陸経営に更に新たなる一步を踏出すべく」⁵⁾、中国特殊法人としての華北交通が誕生した。翌日、本社社屋前東広場にて総裁訓示式が開催された。以下、総裁を務める宇佐美寛爾の発言を一部引用する。

従つて我が社は敢へて日本の利益と謂はず敢へて華北蒙疆の利益と謂はず、東亜諸国共通且永遠の福祉の為に東亜の新秩序建設と謂ふ崇高なる共同目標に向つて力を致すのでありまして、そこに両者の利益相反すと謂ふが如きことはあり得ないのであります。⁶⁾

ここでは「東亜の新秩序建設」が強調されている。また、この表現は訓示式だけでなく、一七日に開催された創業式における「式辞」⁷⁾や創業式終了後に発表された「華北交通株式会社創立に際して」⁸⁾と題する声明などでも繰り返されており、宇佐美の「東亜新秩序」に対する重視の姿勢がうかがえる。

「東亜新秩序」とは、首相の近衛文麿が一九三八年一月三日に発表した帝国政府声明の中で用いられた言葉であり、声明によると、新秩序の建設は日滿支三国の各般における互助連環の関係を築くことによつて、「東亜を安定し、世界の進運に寄与する」⁹⁾ことを目標としたものである。だが、小林英夫が指摘しているように、日滿支三国提携を歌い上げる「東亜新秩序」は、事実上「日本のアジア諸民族への侵略、支配を正当化するものであった」¹⁰⁾。華北交通は表面的には交通事

業を進展させることによって中国の国家建設に貢献し、さらに東亜の永久安定の理想を実現するために創立されたものだが、実際には東亜新秩序の建設の一環として、当時日本の華北進出の実現に協力するという使命を担っていた。また、華北交通は、終戦後の一九四五年一月一日に宇佐美から中国政府交通部に引き渡されたことによって、事実上の終局を迎えた。¹¹ 開設と終焉の時期を見てわかるように、華北交通の活動はほとんど戦時下になされていたといえる。

華文雑誌『新輪』（月刊誌）は華北交通が成立してから間もなく企画されたもので、邦文雑誌『興亜』とともに華北交通社員会の機関誌に挙げられる。¹² 一九三九年六月一日には『新輪』の創刊号が発行された。雑誌の主要編集者は曾榮伯、許伝榮、林錦堂であり、江口胤秀、佐藤欣二、淵脇巖、古家誠一、杉田幸二が発行人として名を連ねていた。当時の華北交通には日本人と中国人がともに働いていたものの、雑誌の使用言語が華語である点や日本の紹介に関わる内容が多い点などから見て、『新輪』は華北交通に従事する中国人従業員を主要な読者と想定していたことが推測される。また、その創刊の目的は、大まかに四つに分類することができる。それぞれ、(1)従業員における「東亜新秩序」や鉄道業務への理解を促進すること、(2)日本の紹介を通じて、中国人従業員に隣国を理解させ、両国の相互提携のための精神基礎を築くこと、(3)文芸を提唱し、文化建設に努めることによって、中国の新しい文化の運動に尽力するとともに、従業員の心の飢えを慰めること、(4)業務に関する各コラムを設けることを通じて、従業員の職守の円満達成に協力することである。

時が経つにつれて、『新輪』は形式および内容において創刊初期と

は完全に一致しないものとなり、調整や変化を続けた。ここでは「皮膚病」が発表された一九四〇年前後の『新輪』に焦点を当て、発行部数、内容構成などの角度から本雑誌の読者の輪郭を明らかにする。一九四二年一月六日に開催された「新輪座談会」の場で、編集関係者が『新輪』の発刊趣旨や刊行状況などについて言及している。そこでの発言から、座談会の開催時点では、『新輪』の編集は「読者の多数を占める中学校教育程度の三〇歳未満の青年社員」¹³を対象としていたことがわかる。また、雑誌の巻末には「非売品」と記されているが、その時点では雇員以上の社員には購読が義務付けられており、費用を納める必要があった。¹⁴ 一方、雑誌の発行部数に目を向けると、一九四一年より発行部数が創刊初期の二万部から二万五千部に増加しており、供給不足のため一九四二年からはさらに若干増加する予定だとされている。¹⁵ ここからは当時の『新輪』の読者数は少なくなかったことがうかがえる。さらに、雑誌の内容に視点を移すと、『新輪』は業務関係や時事、日本の紹介、文芸などの各欄により構成されており、それぞれの分量は業務関係が約三割、時事と日本の紹介が約三割、文芸およびその他が約四割であった。¹⁶

管見の限り、これまでに現物で確認できる『新輪』の最終号は一九四四年一月一日に発行された第六卷第一二期であり、全体では六四期存在する。¹⁷ 約五年半の存続期間において、『新輪』は華北交通傘下の出版物として、文化面や精神面などから中国人従業員を対象に日本ないし東亜新秩序の建設を宣伝すること、および従業員の知見や品行を向上させる、いわゆるあるべき従業員の養成といった二つの大きな役割を果たしていたと考えられる。

一方、華北交通と深い関わりを持っていた満鉄には『協和』という社員会機関誌が存在している。ここでは両雑誌を対照させて、『新輪』の位置付けや特性を確認する。『協和』は発行部数が多く、一九三八年一〇月には八万部を超えていた。²³⁾『新輪』はそれに及ばないが、すでに触れたように、創刊初期は二万部、後に三万五千部という発行部数は当時の北支地域の雑誌群において上位であった。²⁴⁾また、『協和』には刊行頻度や形態における変更が見られるが、『新輪』はほぼ月刊雑誌という形を取っており、一貫性を有している。また、対象読者や創刊目的から見ると、『協和』は全従業員を対象としており、会員の「意思疎通」や「連帯意識の構成」を目的とした²⁵⁾ものだが、『新輪』は華北交通の中国人従業員を対象としており、従業員の養成に重点を置き、より中国に焦点を絞ったことが特徴的である。

二 太宰治および「皮膚と心」の中国語訳が選ばれた要因

『新輪』に掲載された文芸作品には、詩、小説、文芸批評など多様なジャンルが存在する。中国人による創作が大半を占めるが、日本文学の中国語翻訳作品もその重要な一部分である。そこで、現在の段階で確認できる巻号に掲載された日本文学の中国語翻訳作品を以下にまとめる。²⁶⁾「偉大的犠牲」(尾崎士郎作、易曙訳、一卷二期)、「剃刀」(志賀直哉作、何風訳、一卷二期)、「黒大的眸子」(藤沢桓夫作、易曙訳、一卷二期)、「機械」(横光利一作、何風訳、一卷三期)、「新婚の喜劇」(益田甫作、信初訳、一卷三期)、「金曜日の花」(阿部知二作、何風訳、一卷四期)、「幻滅」(林芙美子作、何風訳、一

巻五期)、「田雞」(尾崎士郎作、何風訳、一卷六期)、「草」(森田たま作、白雲訳、一卷七期)、「父親」(伊藤整作、白雲訳、二巻一期)、「皮膚病」(太宰治作、白雲訳、二巻二期)、「鵲鴿之巢」(尾崎士郎作、何風訳、二巻三期)、「心」(夏目漱石作、張叡訳、二巻四期／四巻一期)、「晩春」(高見順作、白揚訳、四巻四期)、「母親」(尾崎士郎作、何風訳、四巻五期)、「大礼帽(上)」／「大礼帽(下)」(横光利一作、何風訳、四巻六期／七期)、「C的話」(武者小路実篤作、張叡訳、四巻八期)、「兩個朋友(上)」／「兩個朋友(下)」(森鷗外作、張叡訳、四巻九期／一〇期)、「蜃楼」(芥川龍之介作、何風訳、五巻一期)、「命運論者(上)」／「命運論者(下)」(国木田独歩作、何風訳、五巻三期／四期)。

以上のように、『新輪』の日本文学の中国語翻訳作品欄に登場した日本人作家は計一六人おり、取り扱われた作品は二〇作品に及んでいる。それらの作家はいずれも日本近代文壇における各流派の代表的な存在である。また、作家個人の経歴に注目すると、中国との関わりを持っている人物が少なくない。例えば、『新輪』での翻訳作品の掲載数が最も多い尾崎士郎は、一九二二年から四回の訪中を経験し、『悲風千里』『成吉思汗』など中国に関係する作品を書き上げた。続いて、掲載数が二番目に多い横光利一は鉄道技師の父梅次郎の長男として生まれ、一九二八年から中国を訪れ、長編小説『上海』を創作した。そのほかに、阿部知二をはじめ、林芙美子、夏目漱石、芥川龍之介といった作家たちはほとんど中国に滞在した経験を持ち、中国関係の作品を書き残している。こうした点から、『新輪』は当時の日本において代表的、かつ中国にゆかりのある作家を選択する傾向があったことが

うかがえる。それらの作家や作品を取り上げることによって、雑誌の文学性を高めるとともに、中国人読者に日本に対してより強い親近感を持たせようとしたと考えられる。

なお、もう一つ注目したいのは作家と戦争との関係である。上掲した作家群のうち、多くの人物は多少なりとも、日中戦争と関わりを持っている。ここではまた尾崎士郎を例として述べたい。前述したように、尾崎は生涯にわたって四回の訪中を経験しているが、一回目の上海行き以外の三回はすべて日中戦争下になされたものである²⁹⁾。なかでも二回目と三回目は従軍作家としてであり、当時の日本政府からの文学者への協力要請に応じたといえる。尾崎は、まさに当時の日本政府と同様の立場に立つ文学者の一人として数えられるだろう。その従軍経歴や政治的立場は、彼の作品が『新輪』に頻繁に取り上げられた理由の一つだと考えられる。『新輪』には尾崎をはじめ、林芙美子、高見順、武者小路実篤といった、戦時下で戦争賛成の姿勢を示し、文学を通じて戦争協力を行った文学者の作品の掲載が多く見られる。

では、太宰の場合はどうであろう。太宰およびその作品が『新輪』に選択された理由は、主に三つ考えられる。まず、各作品に対する編集者によるコメントに注目すると、『新輪』の編集者は流派や作家などを特定せず、できるだけ広範囲にわたって日本文学を読者に紹介しようとする意図がうかがえる。そのため、それまでまだ中国国内に紹介されたことのない作家を紹介することを目的とし、太宰およびその作品を選択した可能性が高いと考える。

二つ目の理由を考えるには、太宰と中国との関わりに目を向ける必要がある。早くも一九二八年七月には、太宰が中国の前漢初の武将・

淮陰侯韓信の「股くぐり」の故事を下敷きに書いた「股をくぐる」が『細胞文芸』に掲載されていた。一九三三年三月に、太宰はもう一つの中国関連の作品である「魚服記」を『海豹』に発表した。このように、実際に中国に足を踏み入れたという記述は見られないが、中国の歴史や文学に興味を示し、さらに中国に関係する文学作品を早期から創作しはじめた太宰は、『新輪』の中国にゆかりのある日本人作家を選択するという編集傾向に合致していたといえよう。

最後に、三つ目の理由として、太宰と戦争との関わりが挙げられる。「きまじめに戦争に向き合わなければならないという至上命題を、太宰治は斜めに見ていた³⁰⁾」と紅野謙介が指摘しているように、太宰は実生活においても文学創作においても、戦争と一定の距離を取っていた。しかし、太宰の作品の創作背景をたどっていくと、国家による文化人への協力要請のもとで創作され、戦争に協力する国策文学と見なされやすい作品は確かに存在する。ここでは代表的な作品を二つ挙げる。一つは太宰が蒲松齡による「竹青」を下敷きに書いた、短編「竹青」である。『文芸』に掲載される前、漢訳「竹青」は大東亜共栄圏建設の一環として創刊された中国向け華文文芸雑誌『大東亜文学』に発表される予定であったという³¹⁾。もう一つは太宰が魯迅作「藤野先生」を骨子として、「内閣情報局と文学報国会との依頼で書きすすめた小説³²⁾」の「惜別」である。現在に至るまで、戦争協力が否かといった太宰の戦争観をめぐる意見は分かれている。しかし、これら二作品については執筆背景から見ても政治や戦争とは切り離せない関係を持つっており、当時の人々から見てもその文学作品には戦争協力のイメージが色濃く反映されていたように見えたことは想像にかたくない。「竹青」

と「惜別」はいずれも「皮膚と心」の『新輪』掲載以降の作品ではあるが、日本文学報国会は『大東亜文学』第三号の原稿を太宰に依頼する³⁵など、当時の人々の目から見ても太宰およびその作品は国策宣揚のために使用する余地を持ったものであったことがうかがえよう。

では、なぜ「皮膚と心」が『新輪』に掲載されたのだろうか。その疑問を解決するためには、『新輪』のもう一つの編集方針に注意しなければならぬ。それは雑誌の娯楽性の重視である。『新輪』において、「以文芸為娯楽」(拙訳：文芸をもって娯楽とする)のような、文芸の娯楽性を重んじる記述は少なくない。それは従業員に『新輪』を愛読させる一つの方法だったと考えられる。一方、「皮膚と心」には、太宰本来のデカダンス的な作品にはあまり見られない、平凡ではあるがお互いに支え合う夫婦の日常生活が緻密に描かれている。同時代評を確認すると、「皮膚と心」は「するすると一気に読み通せる楽しい小説」であり、「今月の作品のうちもつとも楽しめる作品の一つであった」と評されている。³⁷このように、「皮膚と心」は内容や作風から見て、『新輪』の文芸作品の娯楽性を重視するという編集方針に合致していたため、掲載作品に選択されたのではないかと考えられる。

また、日中戦争下という非常事態において、病气や衛生がより一層重要視されるようになっていたことも遠因ではないか。『新輪』は衛生に関わる常識を読者に普及するために、創刊号より病气や衛生コーナーを開設しており、加えて広告欄には医薬品に関する宣伝が多く見られる。ここからは、『新輪』の病气や衛生に対する関心がうかがえる。こうして二八歳の主人公が「治療を受けて病气が治る」ことを描いた「皮膚と心」は、同年代の主要な読者層の関心に合う題材を描いた

た作品であるとともに、彼らに治療を受ける大切さを理解させ、疾病に対する恐怖感を和らげることができる一作であった可能性も考えられる。

三 白雲訳「皮膚病」の特徴

『新輪』は同人向けに原稿料付きで投稿を募集し、掲載する作品を収集し選別している。ペンネームでの投稿が可能であったため、『新輪』に掲載された文章の中には、政治的な圧力から身を守るなど、様々な理由で本名を隠してペンネームで活動していた人物によるものが少なくなかった。本稿で取り扱う訳者である白雲もその中の一人であると思われる。現段階ではその詳細を把握できていないが、『新輪』が同人向けに投稿を募集していた点から、白雲は華北交通に勤務する従業員の一人であったことが推測される。

ここで、華北交通の従業員の状況について触れておきたい。会社の創立当時、華北交通の従業員は満鉄からの移行従業員、社員外、省採用嘱託、旧従業員によって構成されていた。³⁸「事変匆忙の間に多数の人員を一時に傘下に包擁せる結果」、創立当時の従業員の素質は一般的に優秀とは言えず、「日本人社員の半数は所謂傭員級で、其の約六〇%は鉄道経験二年未満」の者であり、中国旧従業員については「大半は素質劣悪にして無学文盲の者が四〇%を占め、而も高齢者多く」存在していた。³⁹後に「新輪座談会」が開催された一九四二年一月には、大半の従業員には高等小学校以下の素養しかなかったという。⁴⁰ゆえに、当時の華北交通の従業員には学校教育を受けた経験に乏しい人物

が多かったといえる。

一方、白雲の場合、「皮膚病」が掲載された時期には、編集者による投稿の語句の誤りに対する添削はほとんど見られない。⁴¹ 訳文の正確さ、自然さから見て、おそらく白雲は学校教育を受けた経験が相対的に豊富で、かつ日本語能力と文学的素養をある程度有した、中国語を母語とする者であった可能性が高いと考えられる。また、白雲訳は原作の初出からおよそ三ヶ月後に世に出たため、訳者が翻訳する際に底本としたのは、一九三九年一月一日付発行の『文学界』であると推測される。

続いて、1 中国の翻訳の審美的な基準に合致する訳文、2 『新輪』に同調する工夫という二つの点から訳文を検討し、訳者の翻訳戦略などの諸問題を考察する。

1 中国の翻訳の審美的な基準に合致する訳文

中国において、翻訳の審美的な基準として定着している「信達雅」の三原則が存在する。「信達雅」とは中国清末の翻訳家の嚴復が『天演論』の「訳例言」に提出した翻訳思想で、「誰もが知っている」「翻訳界の金科玉条」と評され、今日においても重要視されている。その意味合いを解釈すると、「信」とは訳文が原文に忠実であること、「達」とは訳文が自然でわかりやすく筋が通っていること、「雅」とは訳文が文学的美を有することを指す。⁴² 以下に具体例を挙げながら白雲訳を検討する。

① 原文：あなたがお画きになつてゐたのねえ。(一一頁)

訳文：是您画的呢。(一二七頁)

② 原文：「痒ゆくないか。」と聞きました。私は、痒ゆくない、と答へました。(七頁)

訳文：問…

『不痒麼？』『不痒』，我答了。(二二五頁)

③ 原文：いま急に、あの人が、最初でないこと、たまらぬ程にくやしく、うらめしく、とりかへしつかない感じで、(一九頁)

訳文：可是如今又忽而因為那人不是第一次，而感到了悔怨，感到了一失足成千古恨。(一一三〇頁)

白雲訳には、誤訳や誤植だと考えられる箇所が存在するもの、全体として内容的にも形式的にも原作に〈忠実な〉翻訳となっている。

例①は自分の好きな模様の考案者が夫であったことを知った時の「私」の夫に対しての発言である。「您」(「あなた」を意味する「你」の敬称)を使うことによつて、原文における尊敬表現が〈忠実に〉訳されているだけでなく、「私」の夫に対する称賛もありりと読者に伝わる。また、白雲は自然かつ平易な訳文を仕上げるために、文の構造や順序への調整を試みている。例えば、例②においては、白雲は動作を表す言葉と会話文との位置調整によつて、訳文としての判読性を向上させている。なお、白雲は例③に挙げた「一失足成千古恨」のような古来の慣用句と、「光風霽月」(一二六頁)のような文学的な美をそなえた四字熟語を駆使し、訳文の文学性を高めようとしている。ゆえに、訳文からは「信達雅」のレベルに達するための白雲の工夫がう

かがえる。「皮膚病」は全体から見ると、中国の翻訳の審美的な基準に合致した、オーソドックスな翻訳になっていると考えられる。

2 『新輪』に同調する工夫

しかしながら、原作と比較すれば、「皮膚病」には原作の内容の部分的削除、用語の変更、中国北部で多用される方言や慣用語の使用など、『新輪』に同調するためのものと思われる調整の痕跡が存在する。

まずは内容の削除について、両者を比較すると、原作にはあるにも関わらず、「皮膚病」には見られない、削除された内容が主に三箇所指摘できる。以下にその概要を述べる。

(1) 原作の一三―一五頁における、「私」が女学校で皮膚病の病原菌を教わった時や、標本室での見学の場を回想しながら、虫、バクテリア、痒さ、皮膚病への恐怖や憎悪を告白し、さらにそれを哀願しながら自供しようとする自身の心理活動に関する内容。

(2) 原作の一九―二〇頁における、「私」が『ボブライ夫人』を読みながら、気まぐれさをはじめとする女の性質などを思考した内容。

(3) 原作の二〇―二二頁における、「私」が吹出物を防ぐことができないものだと考え、フロベールが女の肌の病気の苦しみに関して書かない理由について思考した内容。

タイトルの変更（「皮膚と心」↓「皮膚病」）があるように、右に整理した白雲訳には見られない部分は、すべて人間の心理や思考に関わるものであり、削除されても物語の展開にさほど影響しない内容である。そこからは、白雲訳では心より皮膚、深層心理の内容についてよりもストーリーを重視する傾向がうかがえる。また、(1)においては、

「私」の病的ともいえる皮膚病への過剰な恐怖と、拷問に対して虫や痒さへの恐れだけで屈服しようとする心理の描写が含まれる。(2)には、従来の〈良妻賢母〉の理念から逸脱する女の性質についての描写がある。この二つの部分はいずれも、従業員の育成に好ましい効果がほぼなく、場合によっては悪影響を引き起こす可能性もあると思われる。一方、(2)と(3)は現実とは一定の距離を置き、理解するのがやや難しい内容といえる。『新輪』の読者層の構成や雑誌の娯楽性への重視などの点から見ると、これらの内容は雑誌の編集方針にそぐわないものであるため、削除されたのではないかと考えられる。

次に、訳文における用語の変更について見る。以下に例を挙げる。

④ 原文：それこそ日本晴れのやうに澄んで、（八頁）

訳文：臉上直如光風霽月，一点雲翳也没有，（一二六頁）

例④においては、日本の独特な文化や感覚を有する「日本晴れ」が『宋史』周敦頤伝に由来する「光風霽月」と訳されている。この二つの用語には意味のズレが存在するものの、この白雲の用語変更には、中国人読者に文意を理解されやすくなるための工夫が感じ取れる。それもまた『新輪』の読者に配慮した結果であろうと推察される。

さらに、白雲は翻訳する際、中国北部で多用される方言や慣用語を積極的に用いる傾向にある。

⑤ 原文：私、銭湯へ行きたんびに、胸や頭を、とてもきつく、（八頁）

訳文：我毎到澡堂子去，胸部和頭，就総覺着難過，（二二五頁）

⑥原文：「身の不運」といふ俗な言葉が、（一七頁）

訳文：俗語説・倒血霉，（一二九頁）

例⑤においては、「きつく」が中国北部の方言「難過」（軽度の病気で体調が悪く、苦しいことを表す）と訳されている。それによって巧妙に、話の舞台が華北交通や『新輪』の読者の所在地に転換されたように感じさせる効果がある。また、例⑥における「倒血霉」（非常に不運であるの意）は中国、特に北部の人間に馴染みのある慣用句であり、白雲はそれらの方言や慣用句を使用することによって、読者に共感や臨場感を覚えさせ、訳文をよりよく受け入れやすくしようとしたと考えられる。

以上、白雲訳には中国の翻訳の審美的な基準への意識と、『新輪』の特質や読者層への配慮が同時に存在するといえる。

最後に、白雲訳「皮膚病」の位置付けについて考えたい。先にまとめた萌芽期に属する中国語翻訳作品は、ほとんどが太宰の同時期に創作された短編小説をもとにしたものである。日中戦争という背景下で出されたこれらの作品には、家庭生活、特に夫婦間の付き合いを描いた内容が多く見られる。各翻訳作品や掲載の出版物への詳しい考察は別稿に譲るが、作品の内容や形式から見て、白雲訳「皮膚病」は家庭生活を描いた作品の一つであるとともに、最初に太宰の女性独白体の作品を、翻訳を通じて中国で紹介したものと考えられる。また、これらの出版物はいずれも日中両国における文化の紹介や交流を目的の一つとしているが、多かれ少なかれ大東亜戦争と関わりを持っており、

しかも戦争の遂行を支持する傾向にある。萌芽期に現れた太宰の中国語翻訳作品の内容自体には、戦争に関わるものはほぼ見られないが、政治色の濃い出版物に掲載されることによって新たな意味を帯びるようになった可能性もある。当時、文化における連帯関係の樹立は、日本政府が戦争遂行を目的に提唱していた、日滿支提携の重要な柱だった。こうして、太宰の紹介の萌芽期に属する出版物は日本政府のプロパガンダを文化面から支持することによって、戦争への協力という役割を果たしていたと考えられる。そのような戦争宣揚の性格を有する出版物に取り上げられた点から見て、翻訳作品は文化における連関を作り出すための手段として利用されていた可能性が高い。ゆえに、白雲訳「皮膚病」は、それら戦争遂行への協力が期待された作品群の第一作と位置付けることができるだろう。

また、中国における太宰治文学の翻訳や紹介の全体的な状況を見渡すと、「皮膚と心」は滅多に翻訳されない一作ともいえる。このように、訳文としては推敲の余地を残しつつも、白雲訳「皮膚病」は太宰作品の中国語訳の嚆矢であると見られる。そして、「皮膚と心」のよくな代表作とは言い難い作品に光を当てることによって、結果的に中国における太宰治文学の紹介や受容の幅を広げようとしたものとして、重要な意味を持ったと考えられる。

おわりに

本稿では、時代背景を考慮に入れながら、華文雑誌『新輪』および白雲訳「皮膚病」に着目し、太宰治と「皮膚と心」が『新輪』に選択

された背景、およびその作品がどう訳されたのかなどの諸問題への検討を通じて、中国における太宰治文学の紹介がいかにしてその萌芽を迎えたのかについて分析した。また、それとともに、白雲訳「皮膚病」の位置付けを、萌芽期およびそれ以降に出現した他の太宰治文学の中国語翻訳作品と結びつけることによって明らかにすることを試みた。現在から振り返ると、中国における太宰治文学の紹介や受容はすでに八〇年以上続いており、時期ごとにそれぞれ異なる様相を呈している。それらを全面的に解明するためには、白雲訳「皮膚病」以外の太宰治文学の中国語翻訳作品の検討と、各論をつなぐ理論的枠組みが必要だと考えられる。これについては今後の課題としたい。

注

- (1) 中国における太宰治文学の翻訳紹介状況の調査をするにあたっては、主に「中国国家図書館・中国国家数字図書館」を利用した。そのほか、王向遠『二十世紀中国的日本翻訳文学史』（北京師範大学出版社、二〇〇一年）をはじめとする、中国における日本文学の翻訳研究関連の書籍をも参照した。
- (2) 調査にあたっては、データベース「全国报刊索引」を参照した。
- (3) 例えば、于梅は『現代日本小説選集』第一集（一九四三年）に収録された「蟋蟀」が太宰治文学の初の中国語訳だと指摘している。「中国における太宰治文学の翻訳と伝播」（山東師範大学修士論文、二〇一五年六月）六〜一一頁。
- (4) 幸野保典「華北交通株式会社創立史解題」（『華北交通株式会社創立史第三分冊』本の友社、一九九五年）一八頁。
- (5) 「第一章 交通会社の成立」、出典は注(4)に同じ。一三一九頁。
- (6) 「訓示」、出典は同上。一三三三頁。
- (7) 同上、一三二〇頁。
- (8) 同上、一三二二頁。
- (9) 文部省教育調査部編、内外教育研究会増補『大東亜新秩序建設の意義』（目黒書店、一九四二年）二二〇〜二二二頁を参照。
- (10) 小林英夫「東亜新秩序」の項、『日本大百科全書』一六（小学館、一九九四年）五五七頁。
- (11) 注(4)に同じ、七頁。
- (12) 菊地俊介「華北交通株式会社における「善隣協和」の矛盾」（『愛知大 学国際問題研究所紀要』一五七、二〇二一年二月）三九〜四二頁。
- (13) 主要編集者の担当状況は以下のとおりである。曾栄伯（第一巻第一期〜第三巻第一期）、許伝栄（第三巻第二期〜第六巻第三期）、林錦堂（第六巻第四期、第六巻第六期、第六巻第七〜八期合併号、第六巻第一〇期、第六巻第二二期）。前掲の菊地論文を一部参照。四二二頁。
- (14) 発行人の担当状況は以下の通りである。江口胤秀（第一巻第一期〜第三巻第一期）、佐藤欣二（第三巻第二期〜第三巻第一期）、淵脇巖（第三巻第二期〜第五巻第六期）、古家誠一（第五巻第七期〜第六巻第四期、第六巻第六期、第六巻第七〜八期合併号）、杉田幸二（第六巻第一期、第六巻第二期）。同上。前掲の菊地論文を一部参照。四二二頁。
- (15) 華北交通創立当時の従業員数は八〇〇〜三二人にのぼり、その中には日本人が一八九〇人、中国人は六一〇九二人いた。比率は日本人が約二四％、中国人は約七六％である。「第4章 華北交通株式会社の成立とその内容」（福田英雄編『華北の交通史——華北交通株式会社創立史小史

- 』ティビーエス・ブリタニカ、一九八三年）七二八頁。
- (16) 編輯同人「発刊詞」（『新輪』第一卷第一期、華北交通株式会社総裁室人事課、一九三九年六月）四―五頁を参照。
- (17) なお、『新輪』は日本の紹介を主要な目的の一つと設定するが、その中には中国各地の文化、宗教など諸事情を紹介する短文が多数見受けられ、華北交通写真資料を連想させる。華北交通によって撮影されたストックフォトには、華北交通関係以外にも当時の中国の資源、産業、文化など的一部も記録されていた。貴志俊彦・白山真理編『京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真資料集成《写真編》』（国書刊行会、二〇一六年）三頁。
- (18) 「新輪座談会」（『新輪』第四卷第二期、華北交通株式会社総務局（養成）、一九四二年二月）三一頁。以下、原文を一部引用する。「至于編輯対象、以占読者中較多数之初中程度、年末滿三十歳之青年社員為目標」（拙訳：編集対象については、相対的に読者の多数を占める中学校教育程度の、三〇歳未満の青年社員をターゲットにしている）。
- (19) 購読料に関して、雇員は五分、準職員は一角、職員は各一角五分である。出典は注（18）に同じ。なお、社員の資格に関して、日本人社員は職員、雇員、傭員の三階級とし、中国人社員は当分の間員司、工役の二階級とされたが、後に職員、雇員、傭員、工役の四階級とした。出典は注（15）に同じ。七二七―七二八頁。
- (20) 注（18）に同じ。
- (21) 同上。
- (22) 現段階で確認できる『新輪』の巻号情報を次のようにまとめる。一九三九年刊（第一卷一―七期）、一九四〇年刊（第二卷一―二期）、一九四一年刊（第三卷一―二期）、一九四二年刊（第四卷一―二期）、一九四三年刊（第五卷一―二期）、一九四四年刊（第六卷一―四、六―八、一〇、一二期）。中国国家図書館や北京大学図書館にて現物が確認できる。なお、その一部はデータベース「抗日戦争与近代中日關係文献数拠平台」や「全国報刊索引」よりオンラインで閲覧できる。
- (23) 『協和』二二六号（満鉄社員会、一九三八年一〇月）四六頁。
- (24) 興亜総本部調査部編『大東亜地域新聞雑誌総攬』（興亜総本部調査部、一九四五年）二六―三四頁。
- (25) 『協和』には月刊↓週刊↓月二回刊↓月三回刊といった刊行頻度の変化が見られる。また、「雑誌型」から「新聞型」へと刊行形態を改めたことがある。平山勉「第一章 満鉄経営を担った人々」（『満鉄経営史』名古屋大学出版会、二〇一九年）六五―六六頁。
- (26) 注（25）に同じ。七八頁。
- (27) 『新輪』に掲載された一部の文章には、作者の名前と所属などの情報が記載されている。そこからは、『新輪』掲載の中国人によって創作された文芸作品はほぼ鉄道関係者（華北交通およびその他の鉄道会社の従業員）による投稿が占め、プロの作家によるものはあまり見られない。なお、それら中国人による創作、は本稿で紹介した日本文学の翻訳作品と重なる傾向が存在すると考えられる。その主要な内容については以下のとおりである。①短編作品が多い。②一般人の生活を描いたものが多く存在する。③作者について、隣国（日本人が中国に、中国人が日本に）にゆかりのある人物の作品が多数である。
- (28) 作品名は雑誌のままとした。
- (29) 都築久義「尾崎士郎と中国」（『愛知淑徳大学論集——文学部・文学研究』）

- 究科篇——』二八号、二〇〇三年三月 二七～三四頁。
- (30) 注(29)に同じ。三〇～三四頁。
- (31) 一部の『新輪』の巻末には「編輯後記」が付されており、それにより編集者の作品に対するコメントなどの情報が確認できる。
- (32) 紅野謙介「太平洋戦争前後の時代——戦中から占領期への連続と非連続」(『戦争と文学 案内』集英社、二〇一三年) 九二頁。
- (33) 山内祥史「解題」(『太宰治全集第七巻』筑摩書房、一九九〇年) 四四八頁。
- (34) 太宰治「あとがき」『惜別』(一)、出典は注(33)に同じ。一二九頁。
- (35) 周海林「日本文学報国会編集「大東亜文学」——戦時下における日中文化交流の一風景」(杉野要吉編『淪陥下北京1937-45 交争する中国文学と日本文学』三元社、二〇〇〇年) 三七五頁。
- (36) 或如「初刊賀辞」、出典は注(16)に同じ。八二頁。
- (37) 三戸武夫「文学界」(『三田文学』第一四巻第一二号、一九三九年一月) 一六四頁。
- (38) 「第二章 交通会社の内容」、出典は注(4)に同じ。一三九六頁。
- (39) 同上、一四〇〇頁。
- (40) 「新輪座談会」において、張家口鉄路局の宮副処長が次のように言及している。「新輪以初中程度為対象、然鉄路従事員衆多、多半都是高小以下の程度、故新輪文章、感覺高深」(拙訳：『新輪』は中学校教育程度の者を対象としているが、鉄道に関わる従業員が多く、その大半が高小小学校以下の教育程度の者であるため、本誌の文章を奥深く感じる)。
- 出典は注(18)に同じ、三三三頁。
- (41) 同上、三三二頁。「新輪座談会」に、投稿面に関して、内容的に差し障り

がない限り、語句の誤りはすべて編集者が添削することが提言された。ゆえに、白雲訳が掲載された時点で、編集者による投稿の用語や文法に関する修正はあまり見られないことがうかがえる。

- (42) 郁達夫「読了瑣生的訳詩而論及於翻訳」(『晨报副鵞』一九二四年六月二十九日)。

- (43) 郭延礼「下篇 二、嚴復的“信、達、雅”及其翻訳」(『中国近代翻訳文学概論』湖北教育出版社、一九九八年) 二四四～二四七頁。

- (44) 「原文：おなか」にも、「(二五頁) / 訳文：背後、(二二八頁)」において、「おなか」を「背後」(拙訳：背中)への訳は誤訳だと思われる。なお、「伊豆」(一二二頁)が「伊豆」(二二八頁)となった箇所は誤植の一例だと考えられる。

- (45) 韓品夫等編『実用方言詞典』(天津人民出版社、一九九六年) 一九〇頁。
- (46) 陳剛編『北京方言詞典』(商務印書館、一九八五年) 五五頁。

付記 本稿は、二〇二三年度広島大学国語国文学会研究会(二〇二三年七月八日、広島大学)における口頭発表の内容をもとに、加筆・修正を加えたものである。本稿に関して貴重なご教示を賜った方々に心より感謝申し上げる。

「皮膚と心」の本文引用は復刻版『文学界』第二巻(不二出版、二〇一〇年)に、白雲訳「皮膚病」の本文引用は『新輪』第二巻第二期(華北交通株式会社総裁室人事課、一九四〇年二月)に拠った。なお、引用文中の傍線、註および中国語の和訳はすべて筆者によるものであり、漢字は適宜新字体に改めた。

(し) ずい、広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程後期在学